



「どこも受け入れてくれない」コロナ後遺症患者の苦悩 院長の覚悟



治療法が確立されていないコロナ後遺症。専門外来を開設した石川県加賀市の「ながたクリニック」には全国から患者が訪れている。「迷子の患者をなくしたいんです」。永田理希院長（50）は力を込める。

今年2月中旬、永田院長はある異変に気づいた。

40代の女性が診察に訪れた。数週間前、クリニックの発熱外来を受診し、PCR検査で新型コロナウイルス感染が確認された女性だった。

すでに感染症から回復しているが、頭痛やせき、嗅覚（きゅうかく）障害が残っていると訴え、こう語った。

「どこにも受け入れてもらえなくて」

当時、全国的に第3波が到来していた。

「これは北陸でも同じような悩みを抱えた患者が増えるかもしれない」

永田院長は予感した。



女性の来訪から約1カ月後、今度は20代の女性が来院した。

コロナから回復したが、嗅覚（きゅうかく）障害や胸の痛みを訴えていた。その後も、同じような患者が訪れ、聞くと、皆、医療機関を「たらい回し」にされていた。

クリニックは、2008年に開業。感染症や外傷、小児科、漢方診療など幅広い分野の診察を行い、乳幼児から高齢者までの患者を受け入れてきたが、こんなことは初めてだった。

「迷子になっている後遺症患者がたくさんいるかもしれない」

### こんなことは初めてだった

4月、「新型コロナウイルス感染症後遺症（ポスコロ）外来」を、クリニックのホームページで告知した。

すると、思わぬ事態が起きた。

北海道に愛知、京都、東京、千葉、沖縄……。デルタ株が流行した「第5波」以降は、毎日のように後遺症患者が訪れた。

県外からの患者は、大半が実家が北陸地方にある人たちだった。後遺症の影響で仕事や学校に通えなくなり、帰省し、通院するようになったという。

## 北海道から沖縄まで...患者が次々と

倦怠（けんたい）感や息苦しさ、せき、味覚や嗅覚の障害、脱毛、食欲不振、睡眠障害……。後遺症といっても程度も内容も様々だ。日常生活を送ることができないほどのケースもあった。

ある大学生は「教科書を読んでも内容が頭に入らない」とクリニックを訪れた。ブレイン・フォグ（脳の霧）が疑われた。学生は3カ月以上の休学を余儀なくされたという。

ある男性は、感染症が回復した後も、激しい息切れに悩まされた。半年間職場に復帰できていないという。

コロナ後遺症の全体像はよくわかっておらず、治療法も確立されていない。半年以上、通い続ける患者もいる。

クリニックでは丁寧なカウンセリングで不調の原因を見極め、漢方診療などで心身のバランスを整えている。「日々学びながら症状を軽減させて、治していく方法を模索しています」

### 丁寧にカウンセリング

と同時に、永田院長は後遺症患者に対応する医療機関が一つでも増えることを願っている。

「検査で異常がなく、治療法がないと言われ続ければ患者は『見捨てられた』と思い、孤立する。専門医への安易な振り分けは結果的にたらい回しにつながる。医療機関が連携して患者に寄り添うことが重要だと思う」

かかりつけ医らは、後遺症に悩む患者にどう接し、専門医の受診をどのタイミングで勧めるべきか――。厚生労働省は、今月1日、後遺症対応に特化した手引きを公開した。

手引きでは、入院歴のあるコロナ患者の追跡調査の結果を公表した。

診断から6カ月が経った246人のうち、疲労感・倦怠（けんたい）感、息苦しさ、睡眠障害、思考力・集中力低下を訴える患者が全体の10%以上だった、としている。

### 国の手引きは公開されたけれど

そのうえで、呼吸器や循環器、嗅覚・味覚、精神・神経など症状ごとに、診断する際の注意点や、患者への対応方法などをまとめた。また、筋力低下などを防ぐリハビリテーション法や労災申請についても触れている。

ただ、永田院長は「治療法に関して触れていない」と指摘する。クリニックには、それぞれの専門の医療機関で検査を受け、異常なしと判断された患者も多く訪れているという。

「迷子の患者をなくすには、どこに行けば後遺症を診て、治療してくれるのか、国や県が情報を集約して患者に見えるようにすべきだ」。より踏み込んだ対応を望んでいる。（川辺真改）



## ながたクリニックの感染対策対応変遷

2008年10月石川県加賀市開業。前任地での感染対策や感染症診療の知識と経験をいかして、当初から個室を2部屋を作り、円の動線を意識し、クリニックを設計。グラム染色用顕微鏡や専用シンクを配置し、供覧できるモニターなどわかりやすい説明や結果を画面で見せる、疾患説明用紙の作成などを重点におく。

【発熱専門外来】 【慢性咳嗽専門外来】 など開業当時から開設。

2009年新型インフルエンザパンデミックの経験から、近い将来、必ず来るであろう強毒型新型インフルエンザパンデミックの備えてクリニックの駐車場2台分をつぶして、通常の入り口と異なる、個室棟を増築建設。

2019年8月、それまでの経験や実績から、満を持して、クリニックの標榜科を変更。

2020～2021年新型コロナウイルスパンデミック。発熱等風邪症状のある患者の受け入れ拒否をする医療機関が増え、問題に・・・。

県内で真っ先に【発熱等検査風邪診療専門外来】に手を挙げ、PCR検査だけでなく、感染症診療を乳幼児～成人～高齢者すべてに対応。

2020年5月、個室での診察検査対応の感染対策のために移動式衝立ボードを設計、作成し、個室棟での各部屋での感染症診療や検査対応をより相互に感染リスクを下げつつ、診療可能に。

2020年7月、全国に新型コロナウイルスが拡大するに連れ、慢性疾患などの持病を持つ患者さんが、医療機関へ受診することが不安になり、受診控えが問題となる。

それまでも風邪症状がある方、職場や同居家族内で風邪症状のある方は、通常の待合室に入らず、すべて車待機や個室待機としていたが、不安の強い患者さんが安心して受診できるように院内に入らずに専用窓口で外から簡易診察が出来、処方箋を受け取ることができる【ウォークスルー外来】を開設。院長が設計し、業者に依頼にて作成。

2021年2月中旬、1人でも1つでも多くの医師をはじめとした医療従事者や医療機関が正しく恐れつつ、発熱等検査風邪診療に対応できる仲間が増えることを願い、2006年から院長が個人で運営している感染症予備校である【感染症倶楽部】の第16期としてWEB配信による講演会を開催。全国より900名の参加視聴となる。

2021年2月下旬、ながたクリニックに1人目のコロナ後遺症（遷延性症状）の患者が受診。

少しずつ患者数が増え、多くの医療機関で対応困難にて受診拒否のため【迷子】となっている現状に気づき、同年4月にクリニックのホームページに【ポストコロ外来（後遺症/遷延性症状外来）】を掲示。

2021年3月05日、医療従事者向けの書籍を上梓。感染症診療を正しく診療できる医師をはじめとした医療従事者が1人でも増えることを目的に風邪やインフルエンザ、COVID-19、中耳炎/鼻副鼻腔炎/咽頭扁桃炎/肺炎やその周囲の外来感染症全般や漢方薬も含めた薬や検査なども網羅した内容を単著で執筆。

「Phaseで見極める！小児と成人の風邪の診かた&治しかた」

2021年8～9月、第6波により石川県、北陸3県でもこれまでにない感染者が増えてくることにより、PCR検査を必要とする患者が一気に増加したことを受け、一般駐車場とは異なる、スタッフ用の裏側の駐車場を1台分空けて、その近くに事前に電話問診等で新型コロナウイルス感染症（COVID-19）である可能性があるかと判断した患者さんが簡易診察とともにPCR検査がすぐ外から検査専用窓口で受けられる【シルバースルー外来（窓口）】を開設。

2021年9月～11月、第5波によりコロナ後遺症（遷延性症状）の患者が急増、北陸3県のみならず全国から受診者が増える。

2022年、一般向けの風邪をはじめとした薬や検査、診断、消毒、感染管理などの書籍を執筆中。

2022年02月、第17期感染症倶楽部 on WEB 開催予定（COVID-19後遺症診療/治療）

2006年～：感染症倶楽部シリーズ 統括代表

2013年～2020年：加賀市医療センター 感染制御/抗菌薬適正使用指導顧問医

2019年～：加賀市医療センター研修医抗菌薬レクチャー指導医